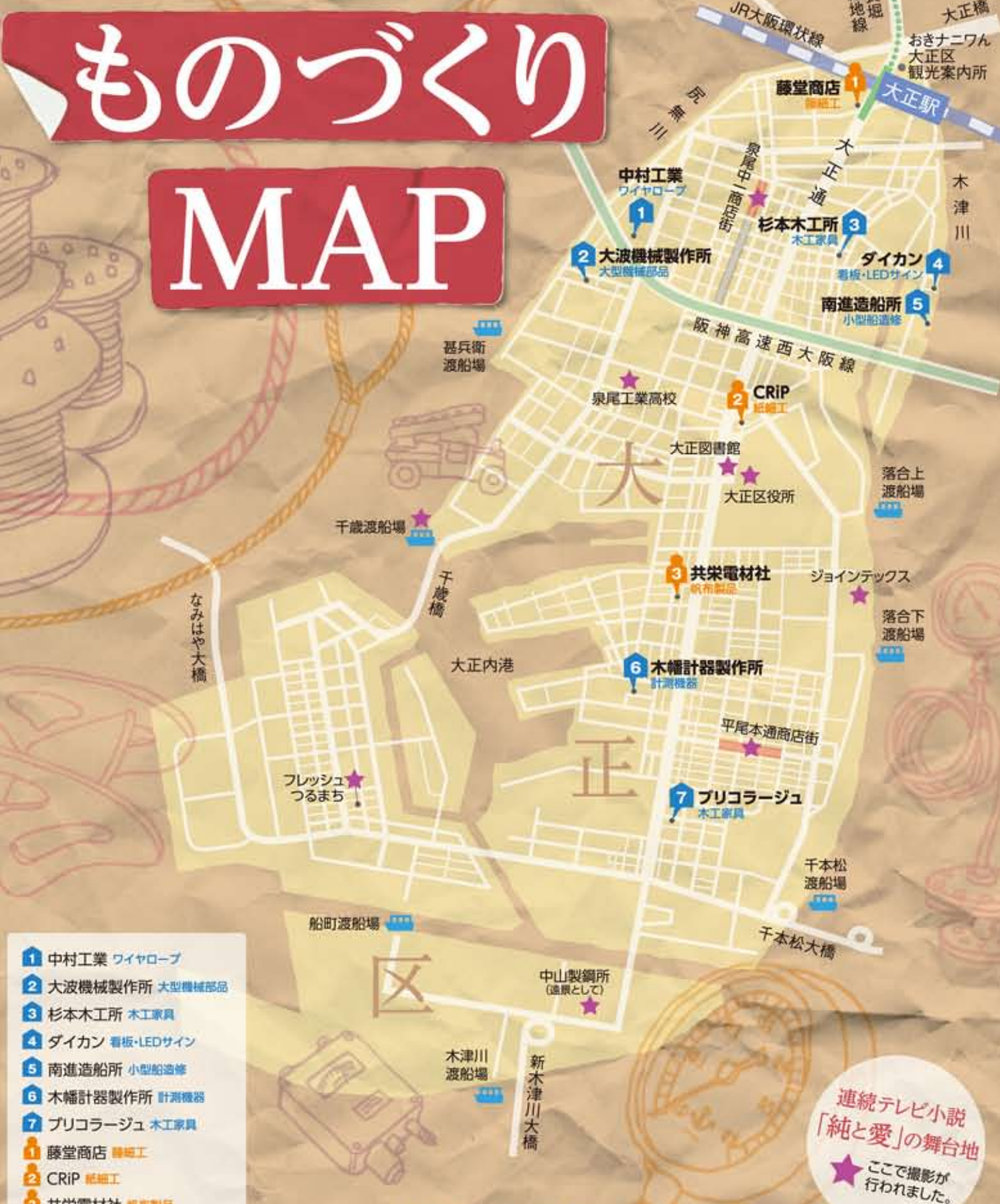


# 大正

あんなものから  
こんなものまで  
つくっています

# ものづくり

# MAP



- 1 中村工業 ワイヤロープ
- 2 大波機械製作所 大型機械部品
- 3 杉本木工所 木工家具
- 4 ダイカン 看板・LEDサイン
- 5 南進造船所 小型船造修
- 6 木幡計器製作所 計測機器
- 7 プリコラージュ 木工家具
- 1 藤堂商店 紙細工
- 2 CRIP 紙細工
- 3 共栄電材社 帆布製品

大阪市大正区

連続テレビ小説  
「純と愛」の舞台地  
★ここで撮影が行われました。

●大正区千島2-2-14  
☎090-1910-6986  
<http://www.facebook.com/hikokami>



## 紙細工

平尾本通商店街に新しい名物ができた。区内外の若者がポーズを決めて記念撮影するその正体は、段ボールでできた巨大シーサーだ。「学校帰りの子どもたちが、通りかかっちはシーサーの鼻をこすっていく。「鼻をなでると願い事が叶う」って(笑)」。嬉しそうに話すのは、生まれも育ちも大正区の坂口さん。段ボールの大型作品だけでなく、小さなペーパークラフトからパッケージデザインまで、紙のことならおまかせの紙細工師だ。「大正区で頑張ってる人を応援したくて、幼い僕の遊び場だった、鉄工所や貯木場を思い出して図面を引きました。大正ならではの鉄と木の神さんです」要るものや発想は現場から生まれる、と坂口さん。区内の商店街を盛り上げようと足繁く通っては、作品にも反映していく。「段ボールのテーブルと椅子で、路上カフェなんてどう?」。アイデアの泉が枯れることはなさそうだ。

喜び子どもの顔が一番の答え。

2 CRIP  
坂口雅彦さん

2012年には、鶴岡にあるIKEAでライブパフォーマンスを行い、多くの人々が見守る中で体長3mもの巨大龍を完成させたことも

## 藤細工



インドネシアから仕入れた籐は、熱を加えるとしなやかに加工しやすくなる。輪にして後口の芯にしたり、編んで椅子の背もたれにしたり



技と素材の使い方は進化している。

1 藤堂商店  
藤堂明男さん

「昔の三軒家には、木材業者や籐職人がたくさん集まっていたんですよ」と教えてくれたのは籐一筋の四代目。大正駅近くにある仕事場の入り口には、日本製からデンマーク製まで、破れた籐の修理を待つ椅子が並ぶ。籐職人が減っていく中、藤堂さんの腕を頼って全国から集まったものだ。「ご年配の方だと、古い椅子に新しく籐を張り替えては、また大事に使われることが多い。旅館でも年季モノを受用してもらっています」

現在は北欧家具のブームで若者にも大注目。椅子や籠の修理が主だが、籐のある生活を提案した室内リフォームや、木材と合わせたオリジナル家具の製作も。「家具屋や木材屋の跡継ぎ同士で集まったりもします。そういうネットワークから新しいブランドが生まれたり嬉しいですね」。伝統の中に若さのぞくデザインを、と意気込みを語ってくれた藤堂さんだった。

●大正区三軒家西1-17-7  
☎06-6551-4417  
<http://www.rattan4u.com>

## 帆布製品



3 共栄電材社  
飯森淳彦さん

道具置き場には、たくさんの原簿が保管されている。「これら区内の企業で作ってもらって、一個一個シルクスクリーン、プリントゴッコみたいなもんです」

今日も作業員たちの安全を支えている。  
取引先は、主に電力会社。丈夫な帆布で、電気工事に携わる人々の工具入れや、工事の際に必要なフラッグを製作している。袋の縫い合わせからフラッグの文字入れまで、すべて飯森さん自身による手作業。数個の発注なら翌日には納品可能な仕事の早さも売りの。「父の仕事を見ながら育って、面白いなと思って継ぎました。「こんなんでいい?」って聞かれて、あれこれ考える時間が一番楽しい」  
工具入れの袋は意外に軽い。「重くないよう、袋口に鉄芯はNG。藤堂商店さんの籐芯を入れてます」。材料の帆布やウレタンも区内の企業から調達している。まさにメイド・イン大正。「もともと西区の事務所を改装する間だけ大正区にいたつもりでしたが、居心地が良すぎてどうしようかなと(笑)」。ご近所付き合いも絶好調。大正区のものづくりは、人情とネットワークに支えられているのかも。  
●大正区小森西1-4-7 ☎06-6555-2135



海と川に育てられた仕事場、大正アイランドを味わう。  
島 と呼ばれる大正区は、水辺の街です。かつて大阪市内で活躍していた渡し船は、その多くが廃止される中で現在は8カ所のうちの7つが大正区民の足として人々を運びます。また、沿岸には工場が立ち並び、国内でも有数の貿易基地だった大正内港には、「けむりの街」の名残を留めようと、区外からもカメラマンが続々と。夕暮れ時に浮かび上がる船や橋のノスタルジックなシルエットに、シャッターを切らずにはいられません。どこか味わい深い大正区の人情も、この海と川に開かれた工場街で育まれました。今も昔も変わらない、ものづくりに対する職人気質と、親しみやすい下町の活気。大正区を訪れた時にふと懐かしさを感じるのは、「けむりの街」の記憶がよみがえるからかもしれません。ものづくり探訪の合間に、そんな大正区の素顔もぜひ探してみてください。